
ラブカクテルス その47

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その47

【Nコード】

N5634D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵はぶっ飛ぶカクテルにて、気をつけてご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前はテンダネススカイでございます。

ごゆっくりどうぞ。

僕は椰子の木。

今空を飛んでいるところだ。

なんて飛ぶとは気持ちがいいものなのだろう。フワフワと風に抱かれ、何とも言えない感覚だ。

このままどこに行くのか、それはさっぱり分からないがまあいいさ。僕が空を飛んでいることに違いはなく、それは俺の昔からの夢でもあったのだから。

しかし何とも足元がスウスウする。それだけがタマに傷だが。

僕はそれでも、大きく広がった葉っぱを太陽に向かって翻し、新鮮な光を味わった。

やっぱりこの辺の太陽光は格別だ。

きっと空気の汚れによる乱反射が少ないおかげで、まるでシルクのような肌触りと甘さ漂うリキュールのような香りが、俺の自慢の椰

子の実の果肉をブランデー

漬けにしてしまう勢いで、光合成して出来た葉緑素が僕の体中を駆け巡る気がする。

僕の葉っぱの艶はいままでにないほどの輝きを放ち、毎日浜辺で見ている旅客機の主翼に走る光に似ていた。

そんなことを満喫していた僕に、不意に声を掛けてくるものがいた。それはカニだった。

カニは細い細い足をカサカサとバタつかせて空を切っていた。

僕は、何だ、カニさんも飛んだのかい？そう語りかけると、今度は腕のハサミをバタバタ大きく振りながら、白い砂浜もいいが空も案外気持ちがいいなーと、大変な上機嫌で言った。そして、椰子の木である僕に、少しつかまって休ませてもらってもいいかと聞いてきたので、快く椰子の実を揺らしてそれを歓迎した。

カニは僕の頭の葉っぱが何本にも別れて生えている、その生え際にちょこんと腰を下ろして、格別な気分だと言って、風に戯れた。

するとその言葉に反論するものがいた。

ロブスター達だった。

彼らは体を丸めては伸ばし、丸めては伸ばしとやっているが、普段より抵抗が少ないおかげでクルクルと同じ場所を回ってばかりいてなかなか落ちつけないよ

うだった。そしてどうすりゃいんだ。だんだんと気分が悪くなってきた。海では酔ったことさえないのにと、ブツブツと小言を言っていたのだった。

俺はそれを見るに見かねて、足元の根っこを差し出すと、ロブスター達は、これはありがたい。失礼。と遠慮がちに、そして照れ臭そうにカサカサとつかまってきた。そしてやっと落ちていたようで、辺り一面の青い空を見渡すと、何だかすがしくて気持ちがいいなどと、さっきの小言をヨソに、空の上を楽しんだ。

そんなところにやって来たのは二枚貝達だった。

彼らはなんと驚くことに、自分達の殻をカパツと広げて、そしてそれをヒラヒラ羽ばたかせて飛んでいたのだった。

いつかこんなことが出来ると思っていたんだと、まるで蝶々のように色鮮やかに、そして優雅でいて華麗に飛んでいた。

いや、飛んでいたというよりも舞っていたと言ひ方のほうがお似合いのその姿に、僕もカニも、そしてロブスターもトローンと魅とれたのだった。それをさも、芸を披露する踊り子のように、二枚貝達は凄いい団体芸で色々な模様を作り上げ、僕達を楽しませ、感動させると、それではまた機会があったらと、ヒラヒラヒラヒラと螺旋を描きながら僕らから離れて行った。

僕らはそれが見えなくなるまで彼らを見つめ、今自分達を感じた芸術的で奇跡的な風景をいつまでも忘れないようにと、胸に焼き付けたのだった。

僕らはその空の広さと、気持ち良さに加えた華やかさにしばし、余韻を楽しんで漂い、時の経つのを忘れていた。すると、そこに鳥達だパタパタと飛んできて、その彼らの大きな驚く声で、僕らは夢から目を覚ましたように意識を元に戻したのだった。

鳥達は僕らにいやいや、ずいぶんと珍しい組み合わせですな。どちらまで？と聞いてきたので、それは僕らにもわからないですと答えると、できればあまり上には行かないほうがいいですよ。戻れなくなりますからと、鳥は僕らに忠告した。

僕らは戻れなくなるということも聞いても、そのことにピンとは来なかったが、あまりに気にしていなかったことに気づかされたように、カニが少し青い顔をしだして不安に怖がり出した。ロブスターも、そんなカニの姿を初めは笑っていたが、強がりのハズの彼らもだんだんと震え出した。

鳥はそんなことにはお構いなしに、まあ仕方ないか。とパタパタと人事のように北へと飛び去っていった。

僕はそんなに怯えだした彼らに、今せつかく空を飛んでいるのに楽しまないと損だ。しかも戻ったからって何かいいことがあるのかと尋ねた。そして、もう一度今のこの状況が普段ではできなかった自由な世界ではないのかと悟したのだった。

すると僕の熱い今の想いが通じたのか、彼らは深々と息を吸って目を瞑り、それをゆっくり吐きながら再び見開らいて周りを見渡すと、確かにこんなに自由を感じたことはなかったかも知れないと、もう一度大きく深呼吸をし、そして彼らに安らいだ笑顔が戻り、それを見た僕にも温かな気持ち体が中をポカポカとさせ、それがとても嬉しくてたまらなくなった。

僕達はいよいよ上へ上へと上がっていき、そろそろ雲をくぐるくらいの高さまでに届きそうなところで、もう下が見えなくなってしまうだろうと、今まで上がってきた足元に目を向けた。

地上から次々と、無数に色々なものが続いて上がってくるのが見える。多くの種類の木や、動物。そして人間達。その中には魚達何かもいるようだった。

僕はそれらを避けるように、自分達が今まで生えていた辺りの白い砂浜を見てみようと思いたが、残念なことにそれらは全て、真っ赤に覆われたマグマによって隠され、とても見別けられる状況ではなかった。

殆どの陸地は、強い火を意味する赤か、海を意味する青、そして何かが燃えたために出ている煙を意味する黒。この三色に染まっているようだった。

僕は空を飛ぶ前の自分を思い出した。

何気ないいつもと変わらぬ白い砂浜。

潮風に葉を揺らして、退屈で平凡な毎日がまた始まると、水平線から昇る日の光に目をやった。その時いきなり大地が大きく揺れ始めて、僕の目の前に大きな波が押し寄せてくるのが見えた。それに驚

く暇もなく、僕の背中の方からは例えようがないくらい凄い音と振動。

山が、山が火を噴いたのだった。

僕は怯えて震え上がったが、それもつかの間。海からやってきた化け物のような波にもぎ取られて昇天した。

きつと一番初めに昇天したのが僕だったから、雲には僕、いや僕らが一番乗りになれたらしかった。

雲はフワフワと、この後何が待っているのか、期待に胸を膨らませた僕らを優しく包み込み、白く白く僕らの心までも白くするように歓迎してくれていた。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5634d/>

ラブカクテルス その47

2010年11月18日14時23分発行